

第25回

学祖・下田歌子展

生誕から宮中奉仕、結婚、女子教育の道へ

2026年4月1日(水) - 5月29日(金)

実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室1・2

[凡例]

- ・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館企画展「第25回学祖・下田歌子展 生誕から宮中奉仕、結婚、女子教育の道へ」(2026年4月1日 - 5月29日)に際し、発行するものである。
- ・本展は、元実践女子大学香雪記念資料館専門委員大塚宏昌(元実践女子大学図書館部長)が企画し、本リーフレット解説文は大塚宏昌が執筆、一部を香雪記念資料館学芸部において追記、編集した。
- ・[]内の記載は推定事項。
- ・展示資料は一部をのぞき、実践女子大学図書館の所蔵。また、実践女子大学図書館『下田歌子データベース』(<https://www.jissen.ac.jp/library/shimoda/db.htm>)に対応するものは資料名の末尾に出納番号を〈 〉で示した。

実践女子学園の創設者である下田歌子は、1854(安政元)年に美濃国恵那郡岩村藩(現岐阜県恵那市岩村)の藩士、平尾録蔵、妻房(子)との間に長女として生まれ、銘と名付けられました。生家の平尾氏は岩村藩主松平氏に代々仕え、学問に優れた質実な家柄でした。祖父の東條琴台は儒学者として知られ、多くの著述を出版しました。しかし幕末に出版した地図が幕府の禁に触れ、越後高田藩邸で謹慎生活を送りました。父の録蔵もまた、幕末にあって尊皇を説く学者でしたが、藩内の勢力争いに巻き込まれ、謹慎、役職・家祿の停止など、不遇の時代を過ごします。こうした中で、成長した銘でしたが、銘は幼いときから和歌や俳句、漢詩、書画に才能を発揮しました。

明治新政府成立によって転機が訪れ、1870(明治3)年、父・録蔵が明治政府に出仕することになり、銘も父の後を追って、翌年単身上京し、和歌を加藤千浪、八田知紀に学び、後には八田知紀の高弟・高崎正風の教えを受けました。また祖父の東條琴台からも漢学、古典その他の教えを受けました。

1872(明治5)年、銘は八田知紀その他多くの人々からの推挙を受けて宮中に出仕し、明治天皇の皇后(昭憲皇太后)にお仕えします。そして優れた歌才によって、皇后より「歌子」という名を賜りました。

今回は、下田歌子の生誕から宮中奉仕、下田猛雄との結婚、女子教育の道を歩むきっかけとなった桃天学校関係の資料を、歌子の人格形成に欠くことのできない家族の資料とともに展示します。

歌子の曾祖父・平尾録蔵

平尾録蔵(1767<明和4>年-1840<天保11>年)は、信順または他山、括囊と号しました。初代・岩村平尾氏友仙から数えて4代目で、岩村藩五十石、郡奉行を務めています。学識が高く、儒学者である林述斎(1768-1841)や大田錦城(1765-1825)とも交流しました。

1. 平尾氏頌徳碑拓本<2892>

平尾録蔵稿 1860(万延元)年 紙本墨摺 1幅 134.4×70.8cm

この頌徳碑は1919年、平尾家の門人等により、岐阜県恵那市岩村の乗政寺山墓地にある平尾家墓所に建立されました。平尾氏祖先より、歌子の曾祖父・平尾他山、祖父・東條琴台を経て、銘(歌子)、録蔵(歌子の弟)の出生に至ります。

3. 印章 平尾録蔵・平尾録蔵・下田猛雄<2940>

18世紀後半-20世紀初期 瑪瑙、木材など 13顆

本学には下田歌子の曾祖父・平尾録蔵、父・平尾録蔵、夫・下田猛雄が使用していた印章が伝来しています。録蔵は儒学者らと交友し漢詩にも優れており、印章も11顆と最も多く残しています。

2. 平尾他山肖像<2626>

初代歌川豊国 平尾他山賛 1816(文化13)年 絹本着色 1幅 64.4×27.5cm

(初代歌川豊国)署名「一陽齋豊国画」印章「式陽齋歌豊之印」朱文方印(平尾他山)賛「幸生海内凱安時 清世豈何歌式□ 看破詩書明不是 終起四十九年 □ 丙子元日試筆年平時年五十 他山 平尾順」印章「他山」朱文方印「平尾順印」白文方印 関防印「雪中金」白文方印

正装で端座する平尾他山の姿が描かれ、上部には他山50歳の元旦試筆である七言絶句が添えられています。初代歌川豊国(1769-1825)は、寛政期から文化文政期を中心に、役者絵や美人画を多く描いた浮世絵師です。本図は肉筆によるもので、表情は役者絵風に描かれ、着物の模様なども精緻に表されています。

歌子の祖父・東條琴台

東條琴台(1795<寛政7>年-1878<明治11>年)は、名は孝蔵、信耕、文左衛門。琴台と号しました。歌子の曾祖父・平尾録蔵(他山)の三女・貞の婿となり嫡男・録蔵をもうけました。しかし、岩村藩内の主流となる程朱学派と合わず、結婚後2年で貞と離縁し、江戸に出ました。

琴台は進歩的な学者で、海防の必要を説いた『伊豆七島図考』等の著述が幕府の忌避に触れ、越後国(現新潟県)高田藩榊原氏の庇護の下、明治維新まで18年間謹慎生活を送ります。維新後、東京に戻り、明治政府の宣教博士となり、後に亀戸天満宮の祠官を務めました。

4. 奉願覚 [復太郎儀嫡孫承祖願]<1780>

平尾録蔵(他山) 味岡奎之允・味岡次郎左衛門宛
1823(文政6)年7月5日 紙本墨書 1通 31.4×38.0cm

平尾録蔵(他山)が、三女・貞と娘婿である孝蔵(のちの東條琴台)との離縁のため、孫・復太郎(のちの録蔵)に家督を譲る旨を岩村藩に提出した願書の写しです。

5. 平尾貞書跡<2629>

平尾貞 紙本墨書 1幅(4種貼り交ぜ) 108.4×44.8cm
1867(慶応3)年 72歳 消息、1876(明治9)年 81歳 消息、
1879(明治12)年 83歳 和歌2首、1883(明治16)年 87歳 和歌1首

貞は歌子の祖母で、東條琴台の別れた妻です。幼年期の歌子は祖母に厳しく躰けられた、という逸話が数多くあります。

6. 東條琴台肖像〈2622〉

鈴木鷺湖画賛 1868 (慶応4/明治元) 年 紙本着色 1幅 106.4 × 35.5cm
署名「我古山人木雄」 印章「雄」白文楕円印 「鷺湖」朱文長方印
「台仍□□人我古」朱文変形印 遊印「我古」白文長方印

東條琴台の姿を簡略な筆致で描いており、その表情はユニークともいえます。鈴木鷺湖 (1816-70) は下総金堀村 (現千葉県船橋市金堀町) に生まれ、谷文晁 (1763-1840) らに師事しました。琴台と鷺湖は書画会などで交流していた可能性が指摘されています。

7. 孝蔵持参書目等覚書〈1753〉

平尾他山 1819 (文政2) 年 紙本墨書 1冊 21.1 × 13.6cm

他山は、三女・貞の婿である孝蔵 (のちの東條琴台) と心ならずも離別した際、その蔵書を送り返しましたが、その一部は復太郎 (録蔵) のために残しました。この資料は、残された蔵書の覚え書です。

8. 先哲叢談 後編

東條耕 (琴台) 著 1830 (文政13) 年 河内屋茂兵衛ほか 8巻4冊 25.2 × 17.6cm

『先哲叢談』は、江戸時代初期から中期までの儒学者を取り上げた漢文の伝記集で、正編は1816年に原念斎が著しました。念斎の没後、琴台が嫡男・原徳斎の許可を得て後編・続編をまとめました。

歌子の父・平尾録蔵

平尾録蔵 (1818 〈文政元〉年-1898 〈明治31〉年) は、復太郎、のち信左衛門や信亨、陽斎と号しました。祖父の歙蔵 (他山) より家督を嗣ぎましたが、岩村藩内で2度の謹慎を命じられ、その不本意な心情および状況を文書に書き留めています。録蔵は非常に筆まめで、漢詩文のほか、幕末維新の世情や日常生活などの日誌、書留などが数多く残されています。

父・東條琴台との文通や交流は、維新の動乱期を通じて絶えることはありませんでした。1878年、琴台が没した後、録蔵は病身のまま娘・下田歌子の庇護の下、1898年2月13日に81歳で没しました。また、妻・房も1905年6月2日に76歳で没しています。

11. 知行五拾石宛行状〈2877〉

松平乗美 平尾信左衛門 (録蔵) 宛 1838 (天保9) 年2月28日 紙本墨書 1通 25.4 × 46.0cm

岩村藩第5代藩主・松平乗美 (1791-1845) より家臣・録蔵へ宛てられた、五十石の領地を与える旨を記した文書です。

12. 岩村藩朝廷帰順に付書留〈1392-1394〉

平尾録蔵 (信亨) 写 1867 (慶応3) 年-1868 (慶応4/明治元) 年 紙本墨書 3冊 25.4 × 17.3cm

岩村藩は、江戸にいた藩主や家老は佐幕派でありながらも、国許では勤王を支持するものが多く藩論が分かれます。録蔵はそうしたやり取りの書状を逐一書き留めました。結局、明治維新に際して岩村藩は勤王に転向し、藩の存続を保ちました。

13. 御預け謹慎被仰付候に付覚書〈1433〉

平尾録蔵 1868 (慶応4/明治元) 年5月付記 紙本墨書 1通 15.0 × 55.2cm

明治維新に際し藩の朝廷帰順に奔走した録蔵ですが、帰藩後、理由不明のままお預けの身となりました。この資料は、申し開きをして通らなかつたいきさつを書き留めたものです。最後に無念の思いで「呵いいい」と書き留めています。

14. 不埒ニ付隠居被仰付〈1435〉

岩村藩議行局差出 平尾録蔵宛 1869 (明治2) 年 紙本墨書 1通 17.7 × 70.9cm

録蔵は謹慎の翌年に隠居を仰せ付けられました。この書状には「尾張名古屋での勤皇周旋が済んだ帰藩途中に、勝手に名古屋に立ち戻ったとは不埒である。その咎により隠居を申付ける」という旨が記されています。

9. 増訂 伊豆七島全図 附無人島・相武房総海岸図〈5094〉

東條琴台 1842 (天保13) 年自序 木版絵地図 1舗 78.6 × 108.8cm
別冊 (袋綴) 1冊 17.5 × 11.8cm

遠流の地であった伊豆七島を海防のために解説したもので、500部限定で私刊されました。しかし、幕府の忌避を受け絶版となり、琴台は高田藩邸で謹慎生活を送ることとなり、翌年には越後高田への居住を命じられました。

10. 東條琴台書簡 平尾信左衛門 (録蔵) 宛 〈1759〉

東條琴台 1864 (元治元) 年 紙本墨書 1綴 24.6 × 15.8cm

琴台の嫡男・信左衛門 (録蔵) に、世情騒然たる江戸から岩村に書き送られた書簡です。離別後も、家族と交流していたことがわかります。

15. 辞令 [宣教掛仰付] 〈1439〉

岩村藩庁 平尾録蔵宛 1870 (明治3) 年6月 紙本墨書 1通 19.6 × 115.6cm

録蔵は明治政府より宣教掛 (神道の国教化を推進する役職) に任命されます。この辞令をもって録蔵は上京し、明治政府に出仕することとなりました。

16. [国許より家族呼寄せ度御願] 〈1441〉

平尾録蔵 岩村県庁宛
1870 (明治3) 年12月控 紙本墨書 15.8 × 65.3cm
1871 (明治4) 年8月控 紙本墨書 14.0 × 40.0cm

録蔵が岩村県庁に宛てた、家族を東京へ呼び寄せることを願った文書です。1871年に、まず当時16歳だった平尾鉞 (のちの歌子) が上京し、家族も続きました。

17. 色紙 綾錦着てかえらば…〈4655〉

下田歌子 1933 (昭和8) 年 紙本墨書 1枚 36.0 × 48.0cm
「明治四年故郷を たちいてける折に よめる 八十歳 歌子
綾錦きて かへらすは 三國山 またふたゝひは 越えしとそ思ふ」

1871年、平尾鉞 (のちの歌子) は、前年に明治政府に出仕した父を追い上京します。故郷を出て、国境であった岐阜県三國山を越えた際、鉞はこの和歌を詠みました。立派に成功するまでは絶対に故郷へは帰らない、という出立の決意が込められています。この色紙は、歌子が80歳の時に当時を振り返って書いたものです。

18. 東路之日記「紀行隨筆 よもぎむぐら」

下田歌子著作集『香雪叢書』第1巻 実践女学校出版部 1932(昭和7)年
1冊 18.9×13.2cm 実践女子大学香雪記念資料館蔵

平尾鉞(歌子)による、1871年4月に岩村を立出してから、岡崎を経由し、箱根に至った道中の紀行文。父・録蔵が8歳の時より平尾家に仕えた高智文蔵と、その娘・鉄女も従者として付き従いました。

歌子の宮中出仕

上京の翌年となる1872年10月、平尾鉞は、歌人・八田知紀(1799-1873)の高弟である高崎正風(1836-1912)、元田永孚(1818-91)らの推挙によって宮中に仕出し、皇后(のちの昭憲皇太后)に仕えます。鉞はその優れた和歌の才能を愛でられ、皇后より「歌子」の名を賜りました。以後、終身にわたり、歌子の名を名乗ることとなります。

1875年、皇后が高等師範学校に行啓した際には供奉を許され、学事に関する講筵の陪席を許されるようになりました。毎年のように昇進し、1879年には官職の一つである権命婦に任じられ、歌人で女官の税所敦子(1825-1900)や、のちの大正天皇の生母である柳原愛子(1859-1943)とも親しく交わりました。

20. 御用ニ付御呼出〈2878〉

宮内省 平尾録蔵宛 1872(明治5)年10月22日 紙本墨書 1通
19.4×39.8cm

宮内省から録蔵に宛てられた、娘・鉞の出仕を命じる書状です。鉞(歌子)は上京の翌年、録蔵と親交のあった歌人の高崎正風、儒学者の元田永孚らの推挙によって宮中に仕出します。

21. 辞令十五等出仕〈2219〉

宮内省 平尾鉞宛 1872(明治5)年10月23日 紙本墨書 1通
21.6×28.8cm

宮内省から平尾鉞(歌子)に宛てられた宮中奉仕の辞令です。以後、鉞は女官として活躍していくこととなります。

22. 平尾録蔵書簡 平尾せき子宛〈596〉

平尾録蔵 [1873(明治6)年]10月11日 紙本墨書 1通 15.5×41.3cm

父・録蔵から娘・せき子(鉞、歌子)に宛てられた、身辺雑用の申し送り事項や、せき子の夫・下田猛雄との連絡取次などについて記された書状です。

23. 陽齋詩文稿 稿本〈1173, 1174〉

平尾録蔵著 下田歌子校訂 1888(明治21)年 自序・元田永孚序
版下稿本 上・下 2冊 23.2×16.2cm

録蔵の漢詩文がまとめられたものです。本書の「陽齋」は録蔵の号です。明治維新後、録蔵は下谷警察署で漢学を講じ、弟子もいました。

24. 下田歌子絵姿〈2636〉

日野樵(生没年不詳) 1899(明治32)年頃 絹本着色 1幅
100.5×69.5cm

画中の歌子が持つ菊花が描かれた檜扇には、「小薨女史親」とあります。女性南画家の野口小薨(本名親、1847-1917)は、官命で、昭憲皇太后の御寝間に花卉図八葉を描き、宮家の御用掛を仰せつかるなど宮中との関係は深く、後に華族女学校の教師も勤めています。筆者の樵については明らかになっていません。

19. 寄留替届〈1442〉

平尾録蔵並家族一同

1872(明治5)年5月 本所花町松平乗命邸内より本所三笠町へ
1873(明治6)年9月 本所南二葉町より本所柳原一丁目へ
1873(明治6)年9月 全戸寄留送 岩村戸長 控3通
紙本墨書 1綴(3枚) 別紙1枚 27.6×39.7cm

平尾家の上京後の引越しの様子が、この控えによりわかります。「松平乗命邸」とは、旧岩村藩邸のことと思われます。その後、1875年5月本所小泉町、6月本所相生町、12月には麴町区永田町高崎正風邸内に移住しています。

25. 書幅 春月〈2458〉

平尾鉞 明治初期-昭和初期 絹本墨書 1幅 34.7×52.8cm

「たまくらは 花のふいきに うつもれて うたい寝寒し はるのよの月」

「春月」という題に対し、鉞が皇后(昭憲皇太后)に詠進した一首。鉞はかねてからその歌才を愛でられ、皇后から「うた」の名を賜りました。『香雪叢書』第2巻「歌集 雪の下の草」に、宮中奉仕時代の作となる「勅題 春月〈大宮の 玉のうてなに のほりてもなほおぼろなり 春の夜の月〉」とともに収められています。

26. 短冊 冬河〈802〉

平尾鉞 1862(文久2)年 紙本墨書 1枚 35.1×6.2cm

「見渡せば 寒さそまさる 大井川 氷の上に つもるしらゆき」

鉞(歌子)9歳の時の自筆による短冊であるといわれています。

27. 短冊 よろこびを…〈1711〉

平尾歌子 [1874(明治7)-1875(明治8)年] 紙本墨書・淡彩画
1枚 36.4×6.0cm

「よろこびを 取やもちひの かしきより はかりしられぬ 四方の民の戸 歌子」

散らし書きによる自筆の和歌に、餅を作る男女の淡彩画が添えられています。

28. 短冊 春草〈796〉

下田歌子 明治末-昭和初期 紙本墨書 1枚 36.3×6.0cm

「黒土を もたくる草に 新らしき ちからも見えて 春はうれしも」

29. 短冊 寄井述懐〈987〉

下田歌子 明治末-昭和初期 絹本墨書 1枚 36.4×6.0cm

「塵ひちの かいらはかかれ 山のみの そこのころの にこりやはする 歌子」

30. 短冊 杖となる野辺のこまつに…〈991〉

下田歌子 1930(昭和5)年 紙本墨書 1枚 36.7×6.0cm

「杖となる 野辺のこまつに 引かれつゝ おい木も千世の 春や重ねむ 七十七歳 歌子」

喜寿に歌子が自ら詠んだ歌。和紙を短冊状に切り、この和歌を書いて喜寿記念として生徒に配ったといわれています。

31. 皇居炎上後の控〈35〉

平尾歌子 1873 (明治6) 年5月 紙本墨書 1綴 12.6 × 17.5cm

歌子が宮中出仕した翌年、宮中にて火災が起きました。その際の様子を記録したものです。

32. [楓のもとを離れて]〈256〉

平尾歌子 [1876 (明治9) 年] 紙本墨書 2綴 14.0 × 20.5cm

楓 (楓掌侍) とは歌人で女官の税所敦子 (1825-1900) のことです。公卿の子女が多い宮中において、歌子と敦子は武家出身者として深い親交を結びます。この資料は、皇后のお付きとして箱根に行く敦子との別れを惜しんだ歌子による随筆の草稿です。『香雪叢書』第1巻「紀行随筆 よもぎむぐら」に収められています。

歌子の夫・下田猛雄

下田猛雄 (1848〈嘉永元〉年-1884〈明治17〉年) は讃岐国 (現香川県) 丸亀藩の藩士でした。剣術家として諸国を武者修行し、岩村藩にも立ち寄った記録が残っています。

1879年11月、宮中より下った平尾鉞 (せき子、のちの下田歌子) と結婚しましたが、時代の流れに乗りきれず、失意のうちに1884年5月、36歳で病没しました。

33. 剣法神秘奥義・島村勇雄免許別伝奥書〈639〉

下田猛雄宛 紙本墨書

剣法神秘奥義 1870 (明治3) 年 1巻 18.2 × 196.0cm

免許別伝奥書 1870 (明治3) 年 1通 17.2 × 186.2cm

下田猛雄は、旧大垣藩士で田宮流師範の島村勇雄 (文政期〈1818-30〉-1879) に剣術を学びました。島村は江戸に出て道場を開き、1858年10月に江戸の山内家で開催された撃剣大会においても、齋藤弥九郎 (1798-1871)、桃井春蔵 (1825-85) など一流の剣術家と並び師範役に名を連ねています。

35. 寄留願〈597〉

下田猛雄 東京府知事宛 1876 (明治9) 年3月写 紙本墨書 1綴 24.3 × 16.2cm

赤坂仲之町より永田町2丁目平尾録蔵方へ身を寄せた際に提出した書類の写しです。

34. 剣道試合人名帳〈645〉

下田猛雄 1861 (万延2) 年-1871 (明治4) 年 紙本墨書 横綴1冊 12.8 × 19.5cm

各地を武者修行してまわった折の記録です。1870年10月、下田歌子の故郷・岩村藩を立ち寄った際的一条もあります。

36. 下田猛雄書簡 平尾せき子宛〈444〉

下田猛雄 [1873 (明治6) 年] 10月31日 紙本墨書 1通 15.2 × 53.2cm

この頃、猛雄は仙台で不慣れな事業を営んでいました。一人で仙台にいるという淋しさや、宮中のせき子 (歌子) への思い、病にかかったせき子の弟・錦蔵への気遣いなどを書き送っています。

37. 平尾せき子書簡 下田猛雄宛〈24〉

平尾せき子 [1877 (明治10) 年] 5月29日 紙本墨書 1通 (1巻) 16.3 × 124.4cm

せき子が宮中から猛雄に宛てた手紙です。この手紙の約2年半後、1879年11月に二人は結婚しますが、なかなか結婚までには至らないさまざまな事情が記されています。

桃夭学校設立

下田歌子は、結婚後の1882年、麹町区一番町の自宅に、私塾であり実践女子学園の前身である「桃夭学校」を設立しました。

桃夭学校の設立は、当時、近代日本にふさわしい上流子女の教育が要望されたことや、病気の夫と家族をかかえ、家庭に埋もれていた歌子の才能を惜しんだ伊藤博文 (1841-1909)、土方久元 (1833-1918) など明治政府の高官たちに囑望されたことによるものといわれています。

38. 下田学校開業上申書 (複写)

下田歌子 東京府知事宛 1882 (明治15) 年3月 1通

学科・教科書・学期・授業料一覧表付 原本：東京都公文書館所蔵

下田歌子が東京府知事に宛てた、学校を設立するにあたっての上申書です。当初の学校名 (下田学校) や、住所、学科、使用予定の教科書などさまざまな事柄が記されています。

40. 桃夭学校教則等改正儀伺〈67〉

下田歌子 東京府知事宛 1883 (明治16) 年9月 伺書・細則・授業時数・学科・教科書等一覧 紙本墨書 1綴 28.1 × 20.2cm

桃夭学校と名称が改定された後、授業時数・学科・教科書等の改正も行われました。

39. 下田学校名称改定届 (複写)

下田歌子 東京府知事宛 1882 (明治15) 年6月 1通

原本：東京都公文書館所蔵

当初の学校名は「下田学校」と申請されましたが、のちに「桃夭学校」と名称改定を行いました。「桃夭」は、『詩経』(周南篇) に所収された、少女がすくすくと成長する様子を言祝ぐ一節「桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 宜其室家」から名付けられました。

41. 桃夭学校地区別生徒名簿〈929〉

[1882 (明治15) 年頃] 紙本墨書 半紙判3枚 24.4 × 17.0cm

桃夭学校が位置した麹町区をはじめ、さまざまな地区から学生が入学しました。

42. [桃夭学校]出席表〈68〉

1885 (明治18) 年8月11日より8月29日まで 紙本墨書 美濃判横折21枚 12.8 × 31.7cm